

私にも
言わせて!
第68回

公衆衛生医師としての決意
一人一人の生活を縁の下で支えていく仕事

船橋市保健所
保健総務課 課長補佐
市田 美保

平成14年香川医科大学卒。同年京都府立医科大学外科入局。一般外科、乳腺外科医を経て、28年4月より現職。医学博士。日本医師会認定産業医・社会医学系専門医・指導医。

臨床医から行政医師となり2年が過ぎようとしています。公衆衛生のマインドを多くの方々に理解してもらえるように、また多職種の方とともに事業を進め、行政でその醍醐味を伝えていきたいと思っています。今回このような貴重な機会を与えて下さったことを関係者の皆さまへ厚くお礼申し上げます。

生い立ちと公衆衛生への思い

「ご出身はどちらですか」と初対面の方に私がよく聞いてしまう質問。この質問でその人となりが分かる気がするのと、話題が広がるという理由からです。ただ自分が聞かれると、一言ではうまく答えられない質問でもあります。私の生まれは福岡県北九州市八幡です。両親もそしておそらくその祖先も九州地方で暮らしてきたと思われるのですが、鉄鋼会社に従事していた父の仕事の関係で、東京都で東久留米市、千葉県で木更津市、大阪府で堺市、そしてまた北九州市、東京都杉並区と幼少から小・中・高校時代にか

けて、色々な土地に住んできました。大学時代は四国で過ごし、就職してからは京都市、奈良市と関西地方で働き、今は千葉県船橋市で働かせていただいています。

どの土地が良かったか、考えてみるのですが、絶対的な一番はないし、鄙りもない。どこもいいところばかりじゃないけど、悪いところばかりでもない(どこかで聞いた歌詞?)。どの土地にも良さがあり、弱みもあり、完璧な場所などないけれど、毎日の営みが全国津々浦々にあり、人々が生きています。でも人はその土地に何かしらの縁があり出会いがあつて、そこを選び暮らしています。公衆衛生学の基本は、どの土地を選んでも、

どこで暮らしていても、その人が、よりよく生きるために、健康・保健・環境面から支えていく学問・分野ではないかと思っています。

船橋市との出会いと
行政医師になったきっかけ

船橋市は、人気の非公認キャラクター「ふなっしー」で存じの方も多いと思います(最近は少しメディアで見る回数も減ってきたかな)。平成29年に市制施行80周年を迎え、人口は63万人に達し、中核市での規模は最も大きく、活気ある市です(できればもっと宣伝したいですがこの辺で)。家庭の事情もありましたが、縁あつて、住み始めて10年がたちます。子育てをしながら色々な方々に支えられ、3年前に疫学研究を論文にし医学博士号を認めていただくことができました。その間にも細々と続けてきた臨床(直近は乳腺外来・乳がん検診が主)にも、少しステップアップが

必要かなと、今後の働き方を再考していた時、船橋市保健所が自宅から自転車で15分の場所に新築されたのです。それもきっかけになり、船橋市保健所のホームページを見ると、「公衆衛生医師募集!」ただし(やんわりと)書いてあった年齢制限まで私はあと3か月。これは運命かなと、今までがん検診に携わってきた経験も生かせるのではない、家族の勧めもあつて、すぐに見学を申し込みました。まだ記憶に新しい出来事です。

疫学研究と高校時代の思いが
公衆衛生へと導いてくれた

このように書くと、偶然の出合いと思ひ付きで公衆衛生に従事したように思われますが、それがすべてではありません。高校時代に現代社会での授業が縁で友人たちと始めたボランティア活動が私の考え方の基本となつています。ボランティアは休日に高齢者宅へお弁当を配達したり、

お話し相手になつたりするという、それほど大した内容でもないのですが、その人が暮らしたい場所で暮らし続けるためのお手伝いを、できる人が無理なく助け合いながら、お互いが普通に暮らしていける社会を築けたらいいなあと、考えていました。そして大学院で学位論文にした疫学研究も公衆衛生につながるものがありました。

私は今も臨床医学が患者さんにとつては、一番身近で大切だと思っています。たくさんさんの臨床医や医療従事者の方々に出会い、お世話になってきましたが、患者さんに良くなつてほしいと願わない方はいませんし、皆さん熱い使命感とプライドを持ち、そして何かを犠牲にしながら臨床をされています。同じく、行政の医師も市民の将来にわたる健康を担うという重要な役割があり、一見して時間の流れや考え方が違うように思えるのですが、その根底には患者さんや市民の皆さまが幸福であるようにと願っているのだと感じています。

今後の展望①

行政で働き始めて感じたこと
まだ行政に入つて2年で、何か大

きなことをしようとか、変えようとは思っていません。郷に入れば郷に従えですので、公衆衛生・行政医師の仕事の考え方、進め方を研修医になつたつもりでじっくり学んでいます。

幸いにも船橋市保健所には2人の尊敬できる大先輩がおられるので、間近で公衆衛生医師としてのあるべき姿を学ばせていただいております。また行政職員の方々は、皆さまとても親切で優しく、組織で働くことに不慣れな私にも色々丁寧な教えて下さり、大変ありがたく思っております。ただ会議が多い割には、あまり本質が議論されないと感じることもあります。外科の臨床では、瞬間で医師が判断を迫られる場面が多いのと同じ、大きな組織の中で判断することの難しさを感じていますが、エビデンスに基づいた施策が行われるように仕事をしていきたいと思つています。

今後の展望②

国立保健医療科学院の研修で
学んだこと
平成29年4月〜7月の3か月間、

埼玉県和光市にある国立保健医療科学院で保健福祉行政管理分野の

研修を受けさせていただきました。

公衆衛生学の基礎から系統的に、普通の講義形式だけでなく体験型の実習を通して、実践に生かせる研修でもありました。何より公衆衛生の知識に乏しかった私にとつては、その分野の第一人者から講義を受けられるという、とても貴重で本当にありがたい研修でした。そこで感じたのは、公衆衛生で必要な知見というのは(もちろん臨床医学でも、その他の分野でもそうですが)、研究者の方々のたゆまぬ努力の賜物だということです。研究の第一線からはほど遠いのですが、その研究の重要性や学び続ける姿勢は忘れずに、物事の真價を見極める力を付けていきたいと思つています。

今後の展望③
健康危機管理から考えること

今、健康危機管理に関すること、に少しずつ携わらせていただいています。災害医療対策や新興・再興感染症対策(新型インフルエンザ対策等)について、保健所がこれほど関与している実態は、臨床医時代にはまったく知りませんでした。とても重要な分野であり、今では保健所の

リーダーシップを最も発揮させなければならぬ分野でもあるとさえ思っています。まだこれからさまざまな部署と連携して、その体制を構築し続けていかななくてはなりません。これらは平常時の準備や訓練が大切です。公衆衛生の難しいところは、いまだ起きていないことを想像して、対策を立てることにあります。それは想像力も必須ですが、悩ましいのはすぐに結果が見えないこと、そして事態が起こる前に対策を立てるので、その結果が対策によるものか偶然なのかの判断がつかないということです。事例が予防の段階で成功するというのは、予防対策のおかげだという実感はないままに過ぎてしまうことが多いのではないのでしょうか。

臨床は苦勞も多いのですが結果は見えやすく、分かりやすい。公衆衛生は苦勞してもその成果は見えにくいし、分かりにくい。ただ発想を転換すれば、何年、何十年、いや何百年という単位で取り組んでいくべき大事な分野だと思ふのです。将来に続く流れの中で、これからも市民の生を縁の下で支える覚悟を持つて従事してまいります。